9 セント・キルダ

私がセント・キルダという島のことを知ったのは、ヒツジについて調べていた時のことである。なんと、鉄器時代のヒツジが、スコットランドの西の離れ小島に自然の状態で生き残っているというのだ。

そして、そのヒツジである、ソイ・シープに、バアッツアー古代農場で出会った。黒い色の、小柄のヒツジだった。バアッツアー古代農場は、考古学者のレイノルズ博士が運営している。いわば実験考古学の農場だ。ソイ・シープは、身軽で、2メートルの垣根を飛び越えられるという。毛はあまり柔らかくなく、季節がくると刈り取らなくとも自然に抜けてくるらしい。

そうしたヒツジが残っていること自体、私にとって大きな驚きだったのだが、さらに驚いたのは、このセント・キルダという島の過去だった。古いヒツジが生き残っていたのは、セント・キルダを構成するソイという小島だが、中心的な島であるヒルタ島には、古くから海鳥を主食に、素朴な農耕を続けてきた人々がおり、1930年8月、ついに最後の36人が島を捨ててスコットランド本土に移り住んだというのだ。

セント・キルダは、スコットランド本土から西に180キロ。アウターヘブリデス諸島のいちばん近い港でも、約100キロある。面積は約6平方キロで、風が強く冬にはゲールが吹き荒れる、きびしい環境である。毎年春になると、ヒツジを数え、冬の間に吹き飛ばされた数を計算していたという。

人々の生活は、海鳥の捕獲と、わずかの農耕と、牛やヒツジの飼育で成り立っていた。スコットランドには、遅くまで封建領主が残っていたが、このような僻遠の島でも、本土のMacLeod of MacLeodという領主に、税を納めなければならなかった。しかし、封建領主といってもスコットランドの場合は、氏族（クラン）の首長であり、血縁こそないものの、もともとは親子のような関係であったといわれている。クランという名前も、ゲール語の「子供」という意味である。島民は、海鳥の油や羊毛で織ったツイードを税として納めたが、何かにつけ領主の保護を受け、そのもとで古くからの生活を守ってきたという。

しかし、そうした生活も、そのまま続くわけではなかった。スコットランド本土では、領主たちの経済的基盤が揺らぎ始め、19世紀半ば以降、「ハイラン

ソイ・シープ (1991 年、バアッツアー古代農場で撮影、著作権フリー)

ド・クリアランス」と呼ばれる、農民たちが土地を追われ、アメリカ大陸などに流出していく動きが強まった。そして、セント・キルダを守ってきた MacLeod も経済的に没落し、島にも商品経済の波が間接的に及んできたのである。島の産物は、しだいに商品価値を失い、伝統的な生活が乱れると、農業生産も低下し、自給自足の生活すらあやしくなりはじめた。島を離れる直前には、冬場に飢えるという事態も生じていたという。

住民の本土移住は、政府の政策であり、それを望まない島民もいたが、とどまることはできなかった。生えている木を見たことがない島民に林業に従事させるなど、新しい土地での生活は、あまり人々を幸せにしなかったという。島は、当時のままで残り、ときどき故郷にもどる人々を迎えた。今は、軍の施設ができ、自然の宝庫として、ボランティアが毎年島にわたって自然保護の活動をしている。自由な行き来はできないが、私たちでもボランティアを志願すれ

ハイランド地方の正装男性
(1991 年 8 月 1 日、ネス湖近辺で撮影、著作権フリー)

ば、島にわたることができるという。

あのイギリスに、収穫を平等に分かち合い、すべてを毎日の会議で決めるという社会が 20 世紀まで存在したという事実は、日本ではあまり知られていないのではないだろうか。

1996　新納泉　　著作権フリー

【Info】セント・キルダ St. Kilda 57.814409, -8.585782
バアッツアー古代農場 Butser Ancient Farm 50.943209, -0.977405

【付記】セント・キルダは、ナショナル・トラスト・フォー・スコットランドの所有となり、世界遺産に指定され歴史的遺産と環境の保護が進められている。